スキャンダル

遠藤周作

スキャンダル

●著者　遠藤周作（えんどうしゅうさく）　●発行者　佐藤亮一
●印刷所　二光印刷株式会社　●製本所
加藤製本　●発行所　株式会社新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町71　振替 東京4-808
電話　業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411
●1986年3月5日発行　●1986年3月30日2刷
定価1500円

© Shûsaku Endô 1986 Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600645-6 C0393

スキャンダル

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

古ぼけた椅子は油が切れているのか、検査表を見終った医師がこちらを向いた時、ギイと音を出した。その音は勝呂(すぐろ)がこの病院にくるようになってからもう耳馴れている。ギイという音をたててからいつも医師はおもむろに口を開くのだが、今日もそうだった。

「ＧＯＴが四三、ＧＰＴが五八ですから、まあ、今度は標準数値を多少上まわる程度ですが、決して無茶をしないでください。いつか仕事で無茶をされた時、四〇〇をこしていましたね」

「はい」

「肝硬変になれば癌に移行する危険性があります。くれぐれも無理しないでください」

安堵の気持があつい蒸気のように吹きあげてきたのは、前月の検査から仕事でかなり体に負担をかけていたので不安だったからだ。礼を言いながら勝呂はこれで授賞式には安心して出席できると思った。

雨のなかで沈黙している宮城を見ると、なぜか勝呂はいつも心が落ちついた。東京の風景でこがとりわけ好きだ。ハイヤーは濠にそって式場に向かっていた。

三年かかって書きあげた作品にこれから賞が与えられる。作家になって幾つか賞はもらったし、

六十五歳をこえた年齢では今更という気持もしないではないが、作品が評価されたのはやはり自尊心をくすぐる。だが、そのくすぐりが今の気持のすべてではなく、それよりも、やっとあの小説で、自分の人生と文学とに纏まりをつけたことにふかい満足感をおぼえ、勝呂はハイヤーの肱かけにもたれて窓をつたう滴をながめた。

ハイヤーがとまり、ボーイが車の扉をあけた。ボーイの制服から湿った匂いがした。自動扉の向こうで今日の会を主宰する出版社の若い社員が彼を待っていた。

「おめでとうございます。嬉しいですよ、ぼくも」

栗本というこの編集者は今度の小説の担当者であり協力者でもあった。資料を探してくれて、取材の旅行の準備も念入りにやってくれた。

「君のおかげですよ」

「とんでもありません。でも本当によかった。これまでの先生の円環を完結した作品ですから。控室に行きましょう。委員の先生たちも来ておられます」

案内状に書かれた時刻に式がはじまった。受賞者である彼と選考委員との席は高いマイクをおいた式台を中心にして左右にわかれ、向かい側に百人ほど客が腰かけている。社長の挨拶がはじまり、選考委員の一人である加納のスピーチがそれにつづいた。

加納とはもう三十年以上のつき合いである。ほぼ同じ頃に文壇に出た。若い頃は、おたがいの作品に神経をとがらせる間柄であった。ある時は反撥し、ある時は共鳴をし合い、四十すぎてからおたがいの違いがはっきりとわかると、それぞれの道を歩むようになった。

来賓のほうを向き、彼の作品の印象をのべている加納の肩が右あがりになっていた。彼も勝呂も若い頃、結核をわずらい、共に成形手術を受けたので、手術したほうの肩がどうしても疲労と

共にあがるのだ。その傾いたあたりにこの男の老いが溜っている。勝呂が肝臓を病んでいるように加納は前から心臓を悪くしていて、ニトロをいつもポケットに入れている。

「勝呂は、この日本でクリスチャンとして育ちました。それは彼にとってある意味では幸福であり、ある意味では不幸だったと思います」

スピーチのうまい加納は、受賞者の文学の核になる問題を皆の興味と好奇心を惹くような言いまわしで話しはじめた。

「勝呂の不幸は日本の風土のなかで神などという我々日本人にはどうもつかみどころのないものを、つかみどころのあるものの如く考えねばならなかった点にあります。だから最初の頃、彼の吹く笛には人はおどりませんでした。出発点から勝呂は自分の言いたいことを――つまり神の物語をどのようにして聞く耳をもたぬ多くの日本人に伝えるかに苦しんだのです。それは三十年以上前のことで、まだ戦争が終ってまもない頃に、私たちは知りあったわけですが……。あの頃、あいつはいつも憂鬱そうな顔をしていました」

三十数年前の――目黒駅にちかい福助という小さな飲屋の古畳の匂いのこもった二階が瞼に蘇ってくる。夏の夕暮、窓には陽にやけた簾がななめにぶらさがり、道路から誰かのふくラッパの音がきこえた。五、六人の青年たちがカレンダーをかけた壁にもたれ、両膝をかかえて勝呂を手きびしく批判した。カレンダーにはサングラスをかけた水着姿の娘が誇らしげに立っていた。サングラスは進駐軍の女たちからその頃の娘たちが学んだ風俗だった。そして勝呂を批判している者のなかに、当時は痩身で頬骨の出ていた加納もまじっていた。

「どこか信用できないんだなあ、勝呂の書くもの」

と斯波という男が耳の穴を小指でほじくりながら言った。

「勝呂は本当の自分をまだ、よく摑んでいないんだ。頭だけの考えで……本ものではないという感じがする」

勝呂はその言葉に反駁できなかった。

「こいつの小説のある部分はね、自分の歯で嚙みくだいてないところが多いんですよ。神について語るのはそれで結構だが、どこか西洋人の思想の借りものだからね、胡散臭いよ」

斯波はしゃべりながら上眼づかいでこちらをみた。彼は自分の言葉が勝呂をどう傷つけたかを計算しているようだった。

「お前、小説はエッセイと違うんだぜ。お前、どこまで自分のテーマをイメージで出せるか考えたことあるのか。本当に胡散臭いよ」

弁解したい気持は、咽喉までのぼってきたが、それを口にすることは友人たちと自分に越えがたい距離を更に作ることだった。

（あんたたちには、この日本でクリスチャンの男が小説を書く困難などまったくわからんだろう）

彼はその言葉をコップにわずかに残った麦酒と一緒に口惜しく飲みこんだ。だがそれと同時に、勝呂は彼のことを胡散くさいと言う斯波の言葉をはねかえせぬ何かをも自分に感じていた。それは心の奥底の一点で自分が何かをいつも匿しているような気がするからだった。

「あの頃、私たちのなかで彼はいつも苛められっ子のような存在でした。私たちは彼にクリスチャンであることをやめるように強要したことさえあります。戦後の若い我々には宗教などはフロイトの言うエディプスコンプレクスから生れた父性像の拡大したものであったり、マルクスの言う阿片であったり、不合理な迷信であったり、クリスチャンなどは日本人の肌に合わぬ偽善者で

――要するになぜ勝呂があちらの神さまなどという厄介なものを棄てないかがわからなかったからです。しかも彼は自分で洗礼を受けたのではなく、幼年時代に、亡くなった母堂からの意志に従って受洗したというだけのことでしたから、私たちには彼の信仰など、たんに習慣的なものか、惰性によるものと思えたのです。御存知のように勝呂は後に切支丹時代に材をとった作品を幾つか発表し、そこで非道な役人たちに棄教を強要される憐れな信徒を語っていますが、あれを書いた時、彼の念頭にはおそらくこの私も意地悪な役人となってあらわれたにちがいありません」

笑いが起こった。勝呂も苦笑しながら友人のスピーチをなめらかだなと思った。小さなホールを埋めた客たちの視線がみな加納のほうに引きつけられている。

「しかしそんな時、彼はいつも弁解するのでした。一度、神につかまった者はそこから逃げることができないと。もちろん私たちはそんなたわ言を信じませんでした。だが勝呂はその言葉をこの三十年以上にわたる作家生活のなかで頑固に証明してみせたのであります。彼は日本という風土と彼の宗教をどのように調和させるかをその文学の課題にしました。その悪戦苦闘が、今日までの幾つかの作品です。そしてその成果が今度の小説です」

笑わせておいて次には引き締め、スピーチにリズムをつくる。客席にかたまって坐っている何人かの女性たちの表情にそのリズムがすぐに反応している。加納もそれを承知して、彼女たちの表情をちらちら窺いながら自分のスピーチの効果を計っているようだ。

「しかし勝呂のよさは彼の宗教のために文学を犠牲にしなかった点です。文学を、私などには縁遠い宗教とやらの召使いにしなかったことです。つまり勝呂はおそらく彼の信仰が嫌悪を感じたであろう人間の醜い、いやらしい、穢れた部分にも小説家として手を突っこみました。だから彼の小説は主人持ちの文学にはならなかったのです」

加納は勝呂の自尊心をくすぐる部分を知っていた。そう、それはある時期、勝呂の心をとりわけ苦しめた問題だった。その頃彼は信頼している外人の老神父からこう言われたのを憶えている。

「どうして、もっと、美しい、きれい話、書かないですか」

そうきいた老神父を勝呂は子供の時から知っていた。戦前から大阪の貧民街でバタ屋をやりながら病人の世話をしたり孤児の面倒をみたりして、日本人から外人良寛さんと言われている異人で、向きあっていると、こちらの頑なな心も溶ける葡萄色の眼と赤ん坊のような笑顔を持っていた。勝呂は彼を見るたびに、聖書にある「幸いなるかな、柔和な人」という言葉を思いだした。

その老神父がある日、心の底から悲しそうな表情をしてつぶやいたのだ。

「あなたの小説、このお正月に読みました。むつかしい漢字はたくさんありましたが読みました。でも、訊ねていいですか」

「はい」

「どうして、もっと、美しい、きれい話、書かないですか」

この言葉と心の底から悲しんでいる顔つきとはその後も小さな仕事部屋で鉛筆を動かしている時、勝呂の心に痛みを与える。

にもかかわらず、彼はその後も美しく、清らかな小説をひとつも書いたことはなかった。筆はどうしても作中人物のなかの黒い、暗い、醜い領域を描写してしまうのだった。人間が持っているどんな世界も、小説家である彼は黙殺したり、無視することはできなかった。

だが彼は作中人物のどす黒い心を描写している間は自分もそれと同じどす黒い心理になっているのを感じた。醜い心を書くためには自分の心が醜くならねばならなかった。嫉妬を描くためには、その嫉妬心のなかにどっぷり浸り、自分をよごさねばならなかった。書けば書くほど勝呂は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間の内部がどんな臭気を発しているかがわかってきた。それを書きながら彼はある時期たえずあの顔とあの言葉とを思いだした。

「どうして、もっと、美しい、きれい話、書かないですか」

やがて歳月がながれ、勝呂はこの問題に彼なりの解答を見つけたように思った。それは本当の宗教なら人間の心が鳴らすこうした暗い旋律、醜い響き、おぞましい音にも応える筈だという予感がしたからである。その予感はやがて作品をつみ重ねるうちに自信に近いものになり、彼はやっと動揺から救われたのだ。

「勝呂文学の特徴は、彼の宗教が罪とよぶものに新しい意味と価値とを見つけた点です。残念ながら非宗教的な私は罪とは何であるかを一向に理解しません……」

と加納はそこで言葉を切って、皮肉な沈黙で間をおいた。その沈黙につられて何人かの聴衆がまた笑声をたてた。

「人間の罪を好んで描いてきた勝呂は、暗中模索の末に、罪のなかには再生の慾求がかくれていることを作品のなかで示すようになりました。どんな罪にも、現在の窒息的な生活や人生から活路を見つけようとする人間の慾望がひそんでいる、と勝呂は言うのです。それはおそらく勝呂文学の独自性だと私は思っています。そして今度の作品はその独自な考えが円熟して描かれているのです」

加納はそこで長い過去を思いだすように、しんみりとした口調で言った。

「勝呂と知りあってから三十年以上、考えてみると彼はこの十年前ぐらいから、行く人もなし秋の暮れという心境になっていたと思います。我々小説家は五十をすぎれば昔の友人たちの文学にたいして脱帽はしてもそれから影響を受けることはまずないでしょう。そのかわり、自分の文学

をただ一鍬一鍬、ほりさげていく仕事が死ぬまで残されている筈です。勝呂も私も同じだと思います」

加納は、皆を傾聴させながら結びに入ろうとしていた。

客席の背後にはさっき彼を控室まで案内してくれた編集者の栗本が立っていた。彼は遅れてきた参列者を空席につれていく役目をしながら、勝呂が賞状をもらう姿を見ようとしているのだ。勝呂はこの仕事のあいだ、縁の下の力持ちになってくれた青年をあとでねぎらいたいと思った。

その横にやはり別の社の女性編集者がいる。名は知らぬがその出版社に行くと玄関などでよく会う小柄な娘で小肥りのえくぼの顔に愛嬌があるから記憶している。そして栗本とその若い女性の背後にもうひとつ、顔があった。

勝呂は瞬きをした。それはまぎれもない彼自身の顔だった。その顔はうすら笑いとも嘲笑ともつかぬ嗤いをうかべていた。

瞬きを何度もした。栗本と女性編集者との背後には誰もいなかった。

パーティがはじまった。

あちこちで人気のある執筆者や画家たちを中心に幾つもの輪ができ、眼をつむると高い笑い声や無数のざわめきにまじって床をする靴音などが粉を臼で挽く音のように聞えてくる。壁にそった寿司や蕎麦の屋台の前にも客は群がり、そのなかに手伝いにきたホステスたちの白い顔が目だった。

「いい話を有難う」

と勝呂は編集者の三、四人を笑わせている加納の右あがりの肩を叩いた。
「ああ、あんなことで良かったかね」
加納は照れ臭さを誤魔化すため、すぐ話題を変え、
「お前、痩せたようだが、大丈夫かね」
「大丈夫だ。しかし、この年になれば体のどこかが痛んでもふしぎはない」
「今、その話をしていたんだ。この頃、めっきり記憶力が悪くなったって。読んだ本など片っ端から忘れる。こんなパーティでも、話しかけてくれる人の名前がどうしても思いだせない時があるよ」
「同じだ。それは」
「眼、歯、何とか、と言うがね。俺の場合は眼、記憶力、歯だな。前から悪い心臓は別だが」
「あのほうはどうですか」
と若い編集者がたずねると、
「あのほうって？　衰えてきたさ。勝呂はどうだ」
それから加納は悪戯っぽい眼をしながら、
「もっともお前はクリスチャンだし、その上、お前の奥さんは実に貞女だからな。しかし勝呂はその年齢になるまで遊びらしい遊びをしたことがないのかねえ。それとも俺たちにはこっそり何かやっているんじゃないか」
「女房にもうちあけたことのない秘密を他人にたやすくしゃべれるかね」
昔とちがって、友人たちの偽悪的なからかいのあしらいかたを勝呂は会得していた。
しばらく輪のなかに入ってから別の人たちに挨拶に行った。そこには文壇の長老の瀬木氏や岩

下氏が談笑していて、
「勝呂君、今度の小説は君の作品のなかで一番よいね」
葡萄酒のグラスを持って顔を赤くした評論家の岩下氏が勝呂に抱きつくようにしてほめた。岩下氏は文壇だけでなく出身校の先輩でもあったから、いつも何かと勝呂をかばってくれる。
「なあ、そうだろ」
と岩下氏はやはり評論家の瀬木道夫の同意を促すように言ったが、
「まあ、文句はないこともない」小肥りの瀬木氏は苦笑して、「しかし今日はおめでたい席だから言わないでおきましょう」
「気にするな。瀬木君はいつも厳しいんだ」
「評論家がきびしくなくてどうしますか」
そうした言葉のやりとりは文壇特有のもので、三十年の間、勝呂はこのようなやりとりをパーティや酒場や座談会で数えきれぬほど聞いた。だがホステスがわたしてくれた水割りのコップを形だけ口にあてながら瀬木氏が今度の作品を批判するならどこだろうと考え、なんだかわかるような気がした。
（しかし、批評されたってどうなるもんでもない）と彼は微笑をうかべたまま心のなかで反駁した。（俺は今度の作品で自分の人生と文学とに纏まりをつけたんだ。誰が何と言おうとその纏まりを変えることはできない）
彼はその時、栗本が円環を完結したと言ってくれた言葉を思いだしてふたたび軽い充足感をおぼえた。そしてこの二人の先輩に誰かが挨拶にきたのを潮に別のグループに加わるために歩きだした。

「先生」
その時、見憶えのない二十七、八歳の女性が狎れなれしく彼の上着を引張った。笑いかけてきた前歯に口紅がきたなくついている。彼女は右手には火のついた煙草を、左手には水割りのコップを持っていて、
「忘れたの？　先生、わたしのこと」
勝呂は眼をしばたたいた。加納も言ったようにこの年齢になると、一、二度しか会わない相手の名や顔を忘れることが多い。
「いやだあ」女は更に狎れなれしく声をだして笑って、「新宿で会ったでしょ、わたしたちが似顔を道で描いていた時……」
「どこで」
「サクラ通りよ。先生も結構、悪いことするんだから」
「人違いでしょう。私じゃありません」
「とぼけてるゥ。わたしたちの展覧会を見てやると言ったでしょ。わたしの友だちに似顔を描かせたじゃない？　それから……」
酔っているのか、女は勝呂の上着を持ったまま意味ありげにウインクした。新宿や六本木をうろうろしている女流デザイナーの卵や女優きどりの娘たちの崩れが、この女の口紅でよごれた歯にしみついていた。
「なにか人違いをしているんじゃないんですか、君は」
「そうか、わかった。先生はあんなところで真夜中わたしたちと遊んでいたことを人に知られたくないのね。クリスチャンなんだから。そうだ、本音とたて前とわけなくちゃねえ……」

からんでくる彼女の手から無理に上着を引張るようにして、勝呂は別の輪のほうに歩こうとした。新聞社のカメラマンが彼にフラッシュをあびせてきたので強張った顔に反射的につくり笑いをうかべた。

「あらあら、気どっちゃって」彼女はそばからからかった。「それが本音、それともたて前？先生」

まわりの客たちがこちらをふり向いた。彼等が勝呂をうかがっているのがよくわかった。かなわないよ、ということを示すために彼はわざと肩をすぼめたが、しかし、無理に笑顔をつくらねばならなかった。

栗本がとんできて女の体を押すようにして連れさった。やがて戻ってくると、

「すみませんでした。誰がここに連れてきたんだろう。今、エレベーターに押しこんで帰しました」

「弱ったよ。しつこくて……」

勝呂は栗本が本気で自分を疑っていないかどうか、心配だった。

「深夜の新宿のサクラ通りとかで、私と会ったと言うんだ」

「ええ、わめいてましたね」

「サクラ通りって、どこなの」

「歌舞伎町の……」と栗本は言いよどんで、「覗き部屋やポルノショップの並んだ通りです」

「私がそこで遊んでいたと言いがかりをつけてきた」

「廊下でもそう言っていましたよ。で、ぼくもきつく怒ってやりました。先生はそんな場所にはいらっしゃらないって」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com